11 月第 1 週の礼拝説教

■日　時：2023 年 11 月 12 日（日）10：30－11：30　降誕前第 7 主日
■説　教： 保科けい子牧師
■説教題：「 わたしたちが義とされるために 」
■聖　書　新約：ローマの信徒への手紙 4 章 13～25 節（新約 p278～279）
■讃美歌：4「 世にあるかぎりの ことばをもて 」
　　513「 主は命を 惜しまず捨て 」

時々、私自身が洗礼を受けて信仰者として歩み出した頃に教えられたことをお話しています。私はその当時、「信仰とはできるだけロゴス化して、自分自身に対しても、他の人に対しても語らなければならない」と教えられていました。そのときに牧師は、歌人の西行法師が伊勢神宮の近くで伊勢神宮の神々しさに感激して詠んだとされる有名な歌、「なにごとのおはしますかは知らねども　かたじけなさに涙こぼるる」を引き合いに出されました。この歌の直接の意味は「ここにどのような神様がいらっしゃるのかは存じ上げないが、身にしみるようなありがたさがこみ上げてきて、思わず涙がこぼれてしまった。」ということです。当時の西行法師は武士の身分を捨て、家族を捨て、故郷を捨てて、行く先も見えない放浪の旅の途中でした。ですから、目には見えないけれども、誰かあるいは何かがいつもそばで見守ってくれていると感じさせてくれるお伊勢さまは、涙がこぼれるほどありがたいという存在に思えたのでしょう。私たちも、様々なことが心配になったり、時には気落ちしたり体調を崩したりすることがあります。そのような時に、たとえば不思議な空気を身近に感じたり、何となく励まされるような雰囲気に包まれたりすると、「なにごとのおはしますかは知らねども　かたじけなさに涙こぼるる」という気持ちになるかもしれません。しかし、母教会の牧師は、キリスト教の信仰とはそのようなものではない、とはっきり語られたのです。では、キリスト教の信仰とはどのようなものなのでしょうか。そして、その内容をロゴス化して語るとはどのようなことなのでしょうか。

その頃の私は、日曜日にはほとんど休まず礼拝に出席し、難しい言葉で語られる説教に心を奪われて、その難しい言葉を聞いている私という存在に酔っていたような気がします。そして、自分自身の中でさえ消化できないのに、その難しい言葉を十分に理解しているかのように、他の人に語っていたような気がします。しかし、何も分からなかったことが逆に良かったのか、難しい言葉がそのまま記憶されていきました。その一つが、「信仰とはできるだけロゴス化して、自分自身に対しても、他の人に対しても語らなければならない」ということでした。常に頭の片隅にあったので、ある時大きな国語辞典を引きました。「『ロゴス』とは、ギリシャ語では、もともとは、人々の話す言葉とい

う意味であった。そのうちに、概念、論理、思想のような意味で使われるようになり、やがて、実体化されて世界を支配する理法、のようにも用いられるようになり、キリスト教では『神の言葉』、すなわち、三位一体の第二位である『子なる神』として用いられるようになった。」と解説されていました。以前に教えられたロゴス化するとは、おそらく、論理立てて客観化して考えるという意味だったと思います。しかし、当時の私は何も分からなかったので、辞書を引き、ロゴスという言葉が「子なる神」である主イエス・キリストをさしているということを知りました。次には、そのことを福音書の書き出しに打ち出しているヨハネによる福音書に出会いました。そして、「神の言葉の神学」に出会うことになりました。おそらく、これからもその延長線上で聖書を読み続けていく生涯になると思います。

ところで、私が頭の片隅に長い間留めているのが、本日の聖書箇所にも記されており、新約聖書の中では100回近く用いられている「義」という言葉です。その半分近くがローマの信徒への手紙に出てきます。この言葉もまた、一般的には「人間の行動・思想・道徳で、『よい』『ただしい』とされる概念である。」と説明されています。それを「神の義」に当てはめれば「神の正しさ、正義」ということになります。　けれども、「神の正しさ、正義」ということを、私自身の中で十分に消化し納得して受け止めているか、というとそうではありません。特に現在のように、世界のあちらこちらで、人と人との間、民族と民族との間、国と国との間などで、憎しみ合いや争いが激しさを増している状況が起こっている状況を見聞きするにつけ、自分自身の足元から主なる神の義に対する信頼が揺さぶられているような気がします。本日の聖書箇所に続く５章には、「信仰によって義とされて」という見出しがついています。ローマの信徒への手紙の中心に位置している「信仰義認」という考えが、３章21節から引き続いて繰り返されています。ルターの宗教改革の内容を表している主題でもあります。そして、５章は「このように、わたしたちは信仰によって義とされたのだから、」と書き出されており、本日の聖書箇所4章13節から25節を「このように」という言葉でまとめて受け止めています。ですから、ローマの信徒への手紙の著者である使徒パウロがこの聖書箇所で、いったい何を語ろうとしているのかをしっかり見ておきたいのです。

本日の聖書箇所の最初の13節に、「神はアブラハムやその子孫に世界を受け継がせることを約束されたが、その約束は、律法に基づいてではなく、信仰による義に基づいてなされたのです。」とあります。神の救いの約束は、アブラハムが律法を守るという良い行いをしたからではなく、信仰による義によって与えられたので、その証人としてアブラハムをここに登場させているのです。アブラハムは、旧約聖書の「創世記」12章で「あなたは生まれ故郷　父の家を離れて　わたしが示す地に行きなさい。」と主なる神様から呼びかけられ、それに無条件で従った人物として記されています。新約聖書のへ

ブライ人への手紙11章ではそのことを、「信仰によって、アブラハムは、自分が財産として受け継ぐことになる土地に出て行くように召し出されると、これに服従し、行き先も知らずに出発したのです。」と解説しています。そこから見えて来るのは、主なる神様のほうから差し出された神様と私たち人間との正しい関係への招きです。私たちも良い行いや立派な業をすることによってではなく、アブラハムと同じように、主なる神様のほうから差し出された正しい関係を信じる信仰によって義とされ救われる、それがパウロの語っている福音の中心なのではないでしょうか。しかし、良い行いや立派な業なしにただ信仰によって義とされ救われるという「信仰による義」は、決して分かりやすい教えではありません。私たち自身もそのように感じてしまうのです。良い行いなしに信仰だけによって罪人が救われるなんて、そんな気楽なことでよいはずはない、と思うのです。今回、私はそのもやもやとした問いに対する答えを、やっと見出したように感じています。それが24節から25節です。「わたしたちの主イエスを死者の中から復活させた方を信じれば、わたしたちも義と認められます。25 イエスは、わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられたのです。」そこには、私たちに神様のほうから差し出された神様の義、言い換えれば、神様と私たちとの間の正しい関係がはっきりと打ち出されています。それは、主イエス・キリストが十字架の死と復活を通して、主なる神様と私たち人間との間の仲立ちをしてくださるので、私たちは神様との関係を正しく繋いでいくことができるということでもあります。それを無条件に信じていくこと、それが「わたしたちが義とされるため」の在り方である、そのように使徒パウロが勧めていることを、私たちは確かに受け止めていきたいと思います。